

おおよまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成19年
8月号

毎月23日発行
通巻444号

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成19年8月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷
★定価 1部 250円
★年間購読料 3,000円(送料共)
★振替口座 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



熊野・朝の荒船海岸にて 奈良市 和田 保さん撮影

昭和62(1987)年7月18日 大倭印刷(株)にて

「言向け矢放す」というお役目

法主 矢追 日聖(満75歳)

大倭印刷の歴史は結構古く、『大倭新聞』によると、「昭和三十三年十一月四日、小型印刷機及び印刷活字購入、軽印刷始まる」と記されています。昭和四十年十月一日、大倭大本宮事業部大倭印刷所設立、業務が本格的に開始となったようです。そして昭和六十二年五月一日、大倭印刷株式会社としてスタートしました。その披露がこの日催され、法主さんがお話しして下さったものをまとめたものです。(編集部・中村千久佐)

自然の流れに添って

特に長い話はありませんけど、私の気持ちとしては益々メデタイんです。いつも私は「神ながら」とか言いますけれど、ものごとは自然の流れに添うということなんです。ちょうど今日も、ここでずーっとこうして見ておつたんですが、一番先に連想してきたのはですね、おたまじやくしの最初の頃のようなものです。内臓がある、目だけある、尻尾だけある、それが段々と日にちがたつてくると後ろ足が出てきて、前足ができ、尻尾が切れて初めて一人前の蛙になるんです。ああいうように大倭印刷もここまで変化してきたんやなということなんです。

昨日も日中に新聞社の人の取材がありまして、私が大倭のことで終戦直後において、なんでこんな色んなことを始めたかという話をしたんですが、それはまあ神様の心でもあるんですね。だいたい三つに分けて説明をしました。

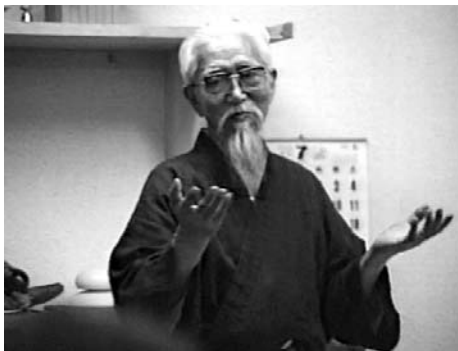
第一は「地下水の精神」。あんた達もね、覚えたいしてほしい、「地下水の精神」。それは大倭の宗教の行き方ですけど、表に立って派手なことはいらない。例えば名誉や、あるいはお金を持つて面はるとかそういうことじゃなくして、陰でそつと、社会の人みんなが幸せになっていくような人徳を積んでいく、そういうような心が「地下水の精神」なんです。それがまあ宗教の心やからね。

それから第二番目には、心と体の健康。あんたら病気になるたらあかんよ。ところがこれは肉体の病気だけの問題やなしに、肉体が病気になるたら心も病気になると思うんですね。それは顕幽一体で自然の原理なんです。だから心も健康、あるいは体も健康、そういうことによつて幸福になる。それが第二番目、「心身の健康」なんです。

第三番目には、助け合うという意味の「相互扶助」。これは私もあなたも皆手を繋いで仲良くしていく、調和の姿やね。それは社会の平和の根本やから、印刷の中も大倭の中も、皆が助けあうて行こう、思いやりの心を持つとうということ、それによつて平和になつていくんや。

この三つの原則、「地下水の精神」「心身の健康」と「相互の扶助」を一つの基本として、大倭の紫陽花邑は集団の生活を始めたんです。それによつて皆が幸せになつて、平和な社会を作つて行こうやないかと言つのが、大倭紫陽花邑というこの共同体です。それを若い人達は覚えておいてほしい。これはその中で、ただもう生活するだけではないけないんです。健康で生活して、そしてまた、その我々が幸せを感じることを世間の人にも示していかなきやいけない。我々だけがそうしていてももつたないから、それを世間の人にも分けていこうというのが、印刷のお役目なんです。言葉の矢を世間に放していかなくてはならない。「言向

▼法主さんが「三つの原則」について、みんなにわかるよう話してくださっています。



▼髪の毛もふさふさの若き中島健社長が、これまでの会社の経緯を話しています。



▼鈴木かあさんと青山日元さんが、パソコンの使い方を吉澤都史季さんから聞いています。



▼披露の小宴にいられた矢追家麻呂教長さんと故柴地則之さん、大東いそさんの姿も。



▼今では考えられない手書きの作業工程票の作成と原稿作りをしている吉澤満さん。



▼若き社員の面々。それぞれの顔が懐かしい。故中島康治さんの姿も。



「け矢放す」ということはね、それは印刷のことなんです。だから今ここに「言向け矢放す」の機械が揃っている。

そういうような意味で、健（※中島健社長）がまだ中学校におられる時に「おまえは一生印刷で行くんやで」と私は言いました。そして大倭の心を社会に対して印刷物でもって言向け矢放す。そうすれば世間の人達が読んでくれるんやからね。そんな言向けの矢を放って行かなければ、この集団生活の意味がないんです。

それにはまず印刷をやらなければいけないと思つて、健にはこれからおまえは印刷をするんやでと言いました。また健もそれを信じてくれて南都印刷に入り（※昭和三十三年三月）、夜は学校へ行きながら丁稚工になって働いてくれた。そういうように健もその心を汲んで一生懸命やってくれたんです。涙が出るほど嬉しい。それが今日の二十年までの話なんです。

四十年目に一人前の蛙になる

その当時まだほんまに小つこい卵のような子どもが、たとえばノン（※青山法義）でも利通（※反保利通）でもね、今こないしてやってくれる。これありがたい。あんた達は紫陽花邑全体の中の一つの部署ということで、部署同士が寄つてお互い幸せに暮らして行こうやないかというのが根本です。だから特に若いあんた達がね、全体を支えてほしい。丁度、蛙の足が生えて尻尾が切れたのと同じことですね。

今言いましたその三つの中で、一番最初の「地下水の精神」と言うたら、これは宗教やから、大倭教、大本宮として実在している。

また「相互扶助」、お互いに助けおうて行こうやないかという、これは形とすれば福祉の三施設で大倭安宿苑として出ています。

ところが二番目の「心身の健康」ということが真中で抜けております。それが今年から、「心身の健康」を担当していく大倭病院という一つの部署が発行して行きます。

大倭のここへ入つて、今日までやってきた自分の理想の中のこの三つの柱が、四十年目で初めて完成したことになってくるんです。これで紫陽花邑を創設した当時の心が、今形として実現してきたんやから、あんた達もそういうような意味での喜びを持つてほしいなと思つてます。

そして病気には心の病気もついてるんやね。だから肉体の方はお医者さんに診てもらうから言うことはな

いけど、精神的なものは大倭の紫陽花邑の皆が相互扶助の心でもつて——別に人としては普通の心ですが——患者さんにも接してほしい。医者にも精神的な治療を私は頼んでいます。そうすれば精神的にも喜びを持って来てくれるしね。

この三つの大倭の柱が、四十年目の昭和六十二年度の今現在に完成してきたということです。そして、そういう意味での喜びと同時に新しい道も出来ました。これもまた四十年前からの待望の道で、「須賀の道」と名前を付けました。だから丁度今年で初めて蛙の尻尾が切れた年になるんです。一人前になったわけなんです。

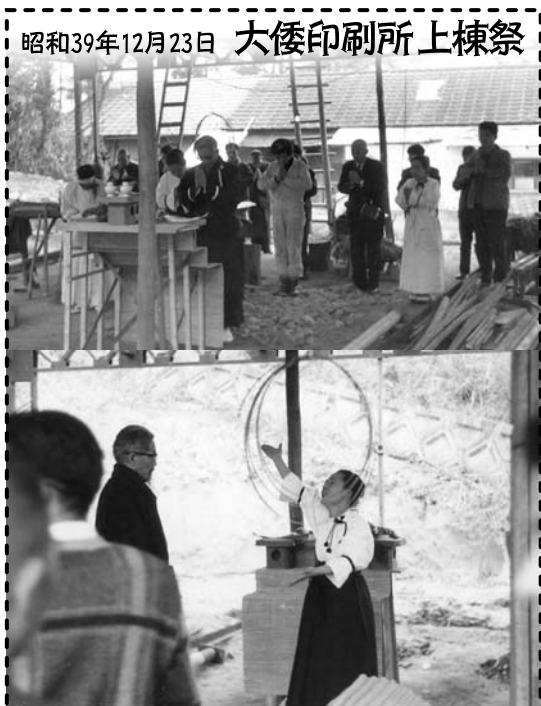
だから印刷は株式会社として出来たし、また倭商の方も有限会社になったし（※中島康治さんの帰幽で、平成十六年廃業）、大倭殖産株式会社はあるし、社会福祉法人の大倭安宿苑というのもあるし、また大倭大本宮の宗教法人の中に病院も出来たし、というように全部が大体尻尾が切れて、蛙になつてくるように一人前になつてきました。

部署は一つ一つ独立はしておるけれども、横の繋がりにおいては一つやから、お互いに相互扶助の形で、また手を繋いで皆が幸せになるようになっていって貰つたら私は嬉しい。

まあ今日、集まっている者は紫陽花邑の一部分の人やけど、あんた達がちよつとそういうような気持ちで、はたの人にも接してくれたらいいなと思つてます。そうすれば大倭の精神というものを皆がわかつて行つてくれるし、お互いに助けおうて行こうやないかという心も出て来ると思っています。

そういうような意味でも今後とも、これを機会として一つ頑張つてほしいなと、私は心から願ひます。よろしくおたのみします。

今日のこの場の集まり有難うございました。



特集

私と戦争(上)

先着順

私の終戦

あじさい邑 中島 健

私たちが三人で夕食を囲んでいた時、突然、上がり口に背囊を背負って直立し、父が復員した姿は今でもはつきりと脳裏に焼き付いている。

その時まで、母親は父の復員をひたすら待ち続け、私二歳と弟一歳を抱えて父の残した小さな店を必死に切り盛りして生活を支えてくれた。母は父の帰りの喜びを嘯締める間もなく、戦線の栄養失調のため三ヶ月の闘病で永久の別れをすることになる。昭和二十二年十二月十六日、帰幽した父と私たち残された家族の終戦が始まったのではないだろうか。

両親の一族を辿ってみると、「うちから農作業の号令を発していた時代があったんや、うちのおばあちゃんは籠に乗ってお嫁にきはったんやで」とよく子供心に聞かされたものであるが、終戦を境に生活は一変していったように思う。

父の死の数ヶ月後、法主さんと出会い、「大倭へ行きたい」と願い、即刻大倭一門での生活が始まったのである。その時、私が小学二年生、弟は一年生であった。

父であり師である法主さんが帰幽され、一緒に大倭で育った弟康治を三年前事故で亡くし、私は今年六十五歳になった。「おじいちゃん、サッカ-

しよう」と孫と遊んで喜びを嘯締めていると、ふと大倭に来た頃の自分の姿が重なって見えてくる。ようこんな子供を二十数人も迎えて育てて頂いたものだ、あらためて大倭で育った喜びを感じて、独り胸が熱くなり涙腺が緩むのである。

まだ母が元気な頃、法主さんと話していると、「昔なあ浜子(※お母さん。大倭で青山日元さんと再婚)が、元と夫婦喧嘩をした時、あんたに出ていけ言われても行かへん。法主さんが言わはんねんやつたら……と言った」と、法主さんの笑いが物語るように、法主さんに全幅の信頼をおいていたことを感じる。

今の生活を感謝しながら、戦争ものを見ると、日本はなんでこんなことをしたのか、人間は想像を超える惨いことを考え、強制する。たまたに戦争の事を記した書物など手にしても、今でも読む気がしないことがある。

私の生まれた昭和十六年は大東亜戦争の火蓋が切られた年である。

同じ民族なのに

奈良市 金 昇 允 (日本名 菅野 昇)

僕は1938年、東大阪市で出生したようです。4才頃、本籍の韓国済州道へ帰り、片田舎で小学校1年生入學。4ヶ月間、1学期、日本語教育を受けたのですが、1945年8月15日終戦となり、日本国植民地から独立したという事で大韓民国となって、新しく韓国ハングル教育を受けました。

冷戦時代突入寸前の時で国内が混乱し、朝鮮半島は38度線という地上に架空に作られた境界によって北と南という二つの国に分かれ、北は左 共産主義 ソ連寄り 反日、南は右 資本主義 米

国寄り 反日として、お互いに反日だけは同じという教育が始まりました。北は金日成中心の、南は李承晩中心の2つのグループで主導権争いに明け暮れました。

1950年、朝鮮戦争が起き民族同士が争うようになるのですが、そのちよつと前、地元の済州道では、左寄りのグループのゲリラ活動が活発で、4月3日、反政府一斉蜂起が4、3事件となりました。夜となると山から民家をおそう事件が頻繁に起き人々が殺され、昼は屋で右寄りの米国主導のカイライ政権の警察がゲリラを鎮圧しようと赤狩りと称し少しでも左がかった人々(インテリが多い)を捕まえました。村の広場で見せしめに村の人々を集めて目の前で、高校生達に銃を持たせて銃殺させました。子供達には見せてはならないということ、一見に行つてはいけない」と親達はこの言のようですが、僕を含め子供達は好奇心でかくれて見に行つていたのを覚えています。

後に戦争に突入すると軍事教育 軍事訓練もするようになりました。済州道の実戦参加はありませんでしたが、半島全体が北の方の力で方々が占領された頃、多くの人々が済州道に流れて来て、小さな島があふれるほどになったことがあって、びっくりしました。僕が中学生の時でした。

休戦協定成立によって、3年間続いた戦争が終りました。僕は中学校を卒業し、1年くらい家の農業を手伝いましたが、親の許しを得て、韓国西南部にある地方都市の木浦という所で、親類が営んでいた衣服工場でミシンを習いました。1年後、1人で京城へ行って紳士服仕立ての仕事に就き働きしました。働きながら高校に入ろうと思いましたが、その時の収入では生活が精一杯で勉強どころではなかったのが青春時代の悩みでした。

そして兄も軍隊に入るし、友人達も次々軍隊へ入るようになり、僕も軍隊に入る年頃になっていました。その頃、クエーカーの咸錫憲先生の宗教新友会の礼拝会に出て聖書の言葉を聞くようになって、戦争に対する考え方が少しずつ変わりました。同じ民族なのに主義主張が違うということで殺し合いするのは気が進まないもので、軍に入らな

いで外国へ逃げることを考えました。
当時、反政府学生運動が烈しくなり、ついに12年間続いた李承晩大統領政権が崩壊し、選挙により民主政権が誕生したのですが（4 19革命）、わずか8ヶ月で軍事クーデターにより消滅、社会は混乱し経済状態も最悪でした。

反共 反日教育下、本当は米国へ行きたかったのですが、お金も実力もなかったので、親類が居る日本へ1962年、密入国をしました。

そして10年かけて、韓国内身元保証人を咸錫憲先生、日本国内身元保証人を矢追日聖師として日本に永住することになって、もう40年が過ぎました。しかし、家族の為との思いで早く経済的自立を目指してお金儲けに走り過ぎた結果が悪く、法主様と咸先生の教えもむなし、一番大切な家庭は崩壊状態？で慙愧に耐えないありさまです。

召集され海外へ引き上げ

神戸市

西城好枝

(87歳・元大倭安宿苑看護婦)

(その1)

私は奈良県出身だが、大阪で病院勤めをしていた時、若さゆえの独断的行動で救護班の訓練生となり出発した。第1回目の出勤は満州ハイラルに6ヶ月、2回目は北支に6ヶ月、3回目は北朝鮮で4ヶ月、江原道庫底という海辺で終戦を迎えた。庫底は静かな美しい村であった。激しい訓練だ

が村人には初めて見るテント内の行動、また海からの貝や魚の差し入れに来た軍用自動車も珍しく見物気分で賑やかな毎日であった。しかしソ連が日ソ中立条約を裏切ったとか、ソビエト軍が元山に上陸とか伝わり、村人の集会は毎晩に及んだ。

上官はいち早く自動車で南に去り指揮官もなく、村長の指揮を待つ有り様だった。村長の分別で、200名の日本兵 軍属、南朝鮮人は早急に脱出すべしと、弁当(朝鮮の餅)や変装用衣類の準備の話し合いが出来た。

夜、歩くことに定まった。昼は草原で眠る。兵士は5、6名が、女性は2名が各一組になり1日10里と言つて南の方向に出発したが、人間業では無理であった。

2人姉妹のように歩いた。北朝鮮人には日本人とはつきり解るようだった。ソビエト兵には全く解らず、ただ時計と万年筆は取り上げられた。日本人と間違われ殺された南朝鮮の婦人があった。明日は我が身かと、一日中緊張がとれない。疲労と空腹、恐怖で、敗戦をつくづくと感じた。横で寝ているはずの相棒の姿がない。探すすべもなく夜になり野道を歩き始めた。畑の大根を抜いて食べながら歩く。人を見れば敵に思えた。

何日歩いたかも分からず、心身は疲れ切った。生きて帰れるかも分からないが、ただ南へ南へ歩くのみである。後ろから「無理をせず乗りなさい」「夜、女性が歩くのは日本人だよ」と牛車の小父さんが言った。日本語が上手である。無言で牛車に乗り「庫底から来ました。ここでどれくらいですか」と聞くと、「庫底か、海からだ」と12里だ。まだ12里か。「女が12里歩くのは大変だ、えらいよ」と言ってくれた。

牛車の上でウトウト眠り、小父さんに起こされた、「牛を走らせたのに、よう眠ったね。3里近

く南へ来たぞ。ここから左へ行くのでお別れだ。「小父さん、ありがとう」と朝鮮のお金30円(今の3万円ほど)を渡そうとしたら、「いいよ、いいよ」と言うので、「日本では紙切れです」とポケットへねじ込んだ。「もらつとく、助かるよ。元気で日本に帰れよ」と手を握った。小父さんに手を合わせ、再び会うことのない別れであった。

少し疲れもとれたようだ。又昼は木陰で眠り、夜歩く。ソビエト兵は、女性も男性も区別なく持ち物を取り上げたり乱暴の限りであった。

疲労でもう足が前に出ないので、ソビエト兵に渡されてもよいと思つて農家の納屋に入りワラの上で横になった。ワラがゴソゴソ音がして、子豚3匹がからまつてきた。豚の声を聞き、その家の老女が納屋を見に来ると、「日本人か」と言つて、家に引き返して行つた。ああ密告されると覚悟したが、老女はどんぶりに飯を盛つてトウガラシ味噌にモヤシを入れてきて、「食べなさい」と手まねで言い、背中をさすつてくれた。地獄に仏であった。片言の朝鮮語で礼を言つて、飯を口に入れた時、ピリッと喉にきたトウガラシの味は今も忘れない、心地良い感触であった。

夕方、鎌のようなものを持つた、息子らしい若者が帰つて来て老女と話をしていた。納屋に来て上手な日本語で、「38度線が国境になった。大河であるし、その日によって水かさの問題だ。越える者にはソビエト兵が橋の上から発砲する。近くまで送つてあげる」と話してくれた。

姉弟ということにして、スケソーダラの干物を弁当代わりに受け取つて、夜道に出た。「お母さん、ありがとうございました」と何回も涙を拭いた。老女のポケットにも30円をねじ込んだ。

暗闇だが、割合人通りがあった。南朝鮮人が古里に急いでいた。木の無い山や草原の、ソビエト兵

の通る道を極度に緊張しながら歩いた。送ると言うのだから近いのかと思ったのに、2晩目にやっと大河が遠くに見えて、発砲音が不気味に耳に入ってきた。橋に人が見える。「ここでいいです。間違つて発砲されては大変です」と、旅を共にした若者と別れる時がきたのである。

「河の向こうでは通用しませんから」と言つて、朝鮮紙幣4枚を青年に握らせた。残りのスケソーダラを全部くれて、タオルで汗や涙を拭きながら初めてかたい握手をした。「農民は1ヶ月30円で生活できる」とお金を大切そうにポケットに入れて深く頭を下げた。「夕方になって渡るといいでしょう」と大河を不安そうに見ていた。

河は100メートル近くあるうと思うが、水があるのは3分の1程度だ。下着になって泳ぎ始めた。水温は割合高く、中心部はかなり深い。闇に紛れて浅瀬に流れ着く。古木かと思つたのは、死体であった。それでも、ソビエト兵にやられたんだなという以外、何の感情も起こらず、自分も1時間でもいい、タタミか布団の上で横になりたいというぐらいの希望しかなかった。

寒い冬でなく良かった。下着を絞つて、又身に着け「今度はアメリカ兵だ」と、重くなる心をおさえ南へ歩く。かなり流されたのか、ソビエト兵の銃の音は遠くなった。無事に渡りきつた姿を、きつとあの若者は見てくれたらうと、それだけは深く信じたのである。

半数は刑務所からの犯罪者というソビエト兵は遊び半分に発砲をしていたし、20〜30人の日本兵や赤十字救護班にも出会つたが、危険を避けて全く対話をせず素通りした。アメリカ兵か、あか抜けた服装の兵士もチラホラ見たが、にこやかに歩いているだけで何の反応もなかった。

坐り込んでいる日本人らしい女性に、大切なス

ケソーダラの残りの半分を黙つて渡すと、うなずいて笑顔もなく口に入れ、手の甲に涙が落ちた。

庫底出発から何日かかったのか分からない、南鮮の求乱では、武器を取り上げられた日本兵が、アメリカ軍の兵舎で働いていた。その様子を「安全」を悟るや、貧血を起こして倒れかけると、日本兵は「しつかりしろ」と厳しく言つた。赤十字ナースも居て「救護班に何という礼儀か」と叱つた。その一等兵は「失礼致しました」と言つて、すぐに毛布を持つてきて肩からかぶせてくれた。初めて与えられた肉じゃがのうまかつたこと。綿の入つたジャンパーももらった。

日本語読みでなく長前と、ここだけは朝鮮読みで言つていた土地で休養になつた。体力は急速に快方に向かつた。上官の命令は天皇の命令と思えと叩き込まれた言葉が、腹立たしく心を刺激する。半数以上が戻らなかつた。

早く釜山に行き、日本行きの船にと心がはやる。日本を出る時、大阪駅で耳近くに口を寄せて「生きて帰つてね。待つてるから」と言つてくれた病院の友人がどんなに喜んでくれるだろう。

何日目だったか記憶にないが夜中に起こされて、汽車に乗せられ釜山に着いた。収容所に入り、毎日港に行つて波に見入つて「この海の向こうに日本がある」と思つと、自然に目頭が熱くなった。5日ほどして大きな引き揚げ船が来た。次々、引揚者が乗り込んで、船がボォーツと動き出した。朝鮮海峡には機雷で船が沈んだ水柱も見え、次は我が身かとも思つた。6時間で日本に到着の予定が10時間かかつて博多港に着いた。

(その2)

引き揚げ船を待ちこがれて収容所にいた時、新しい制服に「國監」と書いた腕章をつけた若者が

絶えず監視しているようで不快であつた。

ある日、その國監の青年が愛想笑いをして「日本はどこへ帰るのですか」と話しかけてきた。

「奈良県です。職場は大阪ですが」と答えると、「尼崎を知っていますか」と言う。「有名なダンホールがあるし、大阪北区に住む者なら知っていますよ。私も知っています。どうして知っていますか。日本語が上手ですね」「俺、尼崎で生まれたんです」「なんや、そうやつたんかいな」と笑うと、なつかしい関西弁だと涙を拭いた。

朝鮮部隊は、京城ソウルに到着してモタモタしている間に終戦になつて、引き返すこともできず現地就職して「この通りです」と言つた。「両親は俺の無事を知りません。知らせたいので引き上げ者の方を探します」「その相手が私かいな」「せや、せや」と、2人は大笑いした。「力になって頂きますか」と真剣な眼になる。

「私は北朝鮮で大恩を受けた。だから、せめて君に返させてもらいます。どうするんよ」と言うのと、「よかつた」と何回も言つて涙を拭き、敬礼もした。「手紙を書きますから」と立ち去つた。

いつも港で見張つていると思つた不快な男の正体が分かつて、気分が良くなつた。10通近い手紙を書いて、港で私がいつも居る場所に届けに来た。一緒に居たナースが、私を救護班だと教えると「ああ、そうでしたか。ご苦労様でした。安心して任せます」とまた敬礼した。

やつと、いよいよ船が動き出した。敗残者の引き揚げ船に見送り人は普通でないものだ。ところが10名近い南鮮の國監の制服の若者が整列して、船に敬礼したのである。船の上からは「サヨウナラ、お元気で、アンニョイ、カシブシヨ」と預かつた手紙を高々と振つた。理由も分からず手を振る者も多くいて、いい風景であつた。

帰国してからも、中国語は殆ど忘れませんが、大恩を忘れまい、韓国語は忘れないようにと、同じ長曾根寮で働く寮母だった菅野（金）弘子さんにはよく韓国語で話しかけたものです。韓国ハンセン病定着村を支援する法主さんの温かい行動、その心を託された柳川義雄指導員の活動は、私の在職中の感動でした。

今、北朝鮮による日本人拉致問題が注目されていますが、私は、飢餓にさらされているという北朝鮮の人々のことが先ず気遣われてなりません。

母から教わった戦中史

奈良市

竹内

靖

(大倭殖産株式会社)

私の学生時代には、第2次世界大戦について教わったことは全くと言っていい程なかったと思う。おそらく私の世代ばかりではなく、私の上の世代（所謂団塊の世代）も10歳ばかり下の新人類世代も団塊ジュニア世代もそうだろう。戦後教育は臭い物に蓋、触れたくないものには目を背け、通り過ぎて行く教育方針だったんだなあと。

私の幼少時代、母や叔父はよく戦中時代のことを話してくれた。私の田舎は兵庫県の三田で、今の三田ゴルフ場の地下には軍事物資が貯蔵されていたため、あんな山間部なのにひっきりなしに空襲があり、空襲警報で防空壕に間一髪もぐりこみ命拾いしたことや、小学校時代の叔父と叔母が学校帰りに襲われ柿の樹の下にもぐり、一緒に下校していた友達を足を機関銃で射抜かれたことなど。当時は小さかったのであまり実感として感じなかったが、テレビなどで戦争中の場面が出てくると母や叔父たちの言って話していたのがこのようなものだと、イメージとして捕らえる事が出来た。

父母もすでに他界し、叔父や叔母も残り少なくなっている。もう20年もしたら戦中の生き証人は全くいなくなってしまう。私は母や叔父たちに言葉伝えて聞いたが、そのような語り部もいなくなるだろう。戦争の記憶を何かの形で日本人の魂の中に刻み込んでおかねばならないと思う。戦後教育をもう一度総括し、戦争の惨めさ、悲しみを後世の日本人に伝えておくべきだと私は思う。

逍遙遊を求めて……

「祝」と「呪」の回帰の巻

奈良県橿原市

伊藤

克夫

漢字学者の白川静さんによると「祝い」と「呪い」の二つの語句は共通の語源からなるという意味深いことを示されている。新聞を広げると、日常が祝と呪の両面に支えられているというものは何となく納得できる。

哲学者の内田樹が書いた「白川先生から学んだ二三のことがら」（大航海63号）によると、「呪いは人間のな事象である。自然のうちには呪いなど存在しない。人間だけが人間を呪い、人間だけが呪いを祓うことができる。それは人間世界内部でのみ通用する『通貨』である。祝福も同じである。人間だけが言葉によって破壊され、人間だけが言葉によって再生される。」

親子や配偶者間での感情のやりとりは、関係性が濃いので、折りであると同時に呪いにもなりやすいというのは何となくわかる。

本来なら同じような環境で育ち、祝いあう関係でいて当然のような親族のあいだでさえ、わざと理解されたくないという態度をとることも現代ではよくあることのように思う。心理学の言葉で反

動形成と言うそうだ。

まして来歴の異なる人と人が共感したり、わかりあうことは本当に困難なことだと思う。単にわかったつもりということに過ぎない場合がある。

良かれと思つてやったことが、結果的に、思いと裏腹に全く思いもかけない災厄をもたらすことがある。水俣やチェルノブイリが象徴するように「人は光を求めて闇を深くしてきた」（ある詩人の言葉）というのが実際のところなのかもしれない。

荘子の言う無為（無作為）という言葉の意味が、うまく飲み込めない時期が僕には続いた。しかし、作爲のない時が流れる時、投げ出されてある生を、無作為に選り取る生に乗り換えることができるのかもしれない。『コミック『夕風の街、桜の国』（このの史代著）では、戦後10年、原爆で失った姉に、自分が生きて幸せになることに罪悪感を抱く女性が、呪詛を乗り越えて生きたいと望み始めた時に、原爆後遺症に襲われる……時が流れ、彼女の姪は自分の生まれる前に「確かにこの二人を選んで生まれてこよう」と決めたことを想い出す。今の僕なら、このように時間の向こうから回帰してくるものに、人が担う宿命はどこから来ているのか訊ねることができるように思う。

僕にも幼い子どもたちがいるのだが、子どもは僕の所有物ではない。僕は子どもがこの世に生まれてくるきっかけをつくつたにすぎない。そのきっかけが長い時間を経過して、回帰してくるものが子どもたちだと考えられるとおもしろい。

壊れることがあっても、できればまたお互い祝ひ合うかたちで回帰できるような家族関係を築いていきたいと思つている。

AWTCC日誌

7月14日 午前10時半より奈良パークホテルにおいて邑交会。昇ちゃん、青山法義さんと映画『ダイ ハード4.』へ。続くバカンスのあてがなく焦る日々、その元気さには脱帽です。

7月15日 大倭神宮月次祭。
7月21日 大倭会主催「弥栄踊り」準備会の打ち合わせが、夜7時から大倭会館で。

7月23日 大倭大本宮月次祭。
この日は、昭和38年7月23日の「加美さんの心は、囲いを作らない事」などの法話テープを聞かせてもらいました。（「写経」という気持ちで、本紙掲載のためテープ起こしのお手伝いをして頂けるとありがたいです）

山伏の資格を持つイタリア
7月29日 本紙編集部藤本宏秋一家が舞鶴市から京都府宮津市へ移転したという話が届きました。
7月30日 大倭神宮にある奇稲田姫さんの終焉の地を求めて山梨県の花井潔さん、千葉県の浦

人、セルジオ、ギラルデッリさんが月次祭に参加、法話が面白いと言っていたそうです。
7月28日 午後から夜にかけて「交流の家40周年の集い」が行われ、その間のいろいろな関係者の大勢の人達で交流の家ホールがふ



交流の家40周年の集い。関係者の大勢の人達で交流の家ホールがふ

島達也さん、北崎寛子さんが来邑されました。
8月1日 大倭病院開院20周年。午前10時半より矢追家麻呂教長さんを祭主に病院の守護神「東山坊大善神」に対して感謝の祭事が行われました。
8月4日 午後5時30分より大倭病院において創立20周年祝賀会が開かれました。



大倭病院創立20周年祝賀会。

挨拶をされた4名の方々もそれぞれにこの20年を語られ、そのお話から現在の職員の間にも「大倭病院」の時の流れを汲み取られた様です。
8月6日 大倭神宮月次祭。
8月6日（午前8時15分）及び8月9日（午前11時2分）奈良市の呼びかけで、拝殿の太鼓が反保隆臣さんによつて打ち鳴らされ、広島と長崎の原爆投下による犠牲者の御霊を慰霊しました。
夜、大倭会館にて邑倭の会。

大倭安宿苑では

7月28日 恒例の大倭安宿苑夏祭り。途中、突然の夕立もありましたが、職員、ボランティアさんの協力で事故もなく真夏の大イベントを乗り切りました。



大倭安宿苑の夏祭り。

菅原園

7月19日 イトーヨーカドー出張スパー。今回は季節の衣料品も用意してもらいました。
（須加宮寮）
8月4日 登美学園の夏祭りに30名程度の住苑者が参加、夜店を楽しみました。
（長曾根寮）
7月12日（デイサービス）トリップコンサート。ギターや他の楽器を使って一緒に歌ったりそれぞれの楽しみ方をされていました。

にからまる心の動き（情感）を言葉にする。五七五音は不問。娘になつても父の手をとりこの辺のユリカモメ 森彦（八重垣園）
7月16日 外出支援で白毫寺へ「えんまもうで」のお参りに。
俳句投稿箱より 「夏祭り冷しげんざい舌つづみ」「万葉の歌碑のほとりに夏桔梗」

ATMIC

* 月次祭（大倭神宮）
9月6日（木） 午後2時より大倭神宮にて。
* 大倭会主催第四六五回櫻会
9月9日（日） 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

* 月次祭（大倭神宮）
9月15日（土） 午後2時より大倭神宮にて。
* 月次祭（大倭大本宮）
9月23日（祝） 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

編集後記

▼本庁事務所の二階を暗室状態にして法主さんが撮影されてきた昭和34年以降のハミリフィルムを編集している。隣の机では齋藤正宏さんが法主さんの法話録音テープを編集してくれている。

これもまた経典で言うところの「写経」の仕事である。自分の為ヒトの為に。(P)

第296回 大倭会文化行事予告 秋の一泊旅行のご案内 ——阿波への道を訪ねる——

皆さん、お誘い合わせて参加ください。

日時：平成19年
10月28日(日)～29日(月)

行き先：淡路島・徳島方面
(震災記念館・伊弉諾神社・藍染め工房など)

お泊り：淡路島海上ホテル
兵庫県南あわじ市南淡町福良甲21-1
電話 0799-52-1175

定員：50名程度
費用：28,000円
詳しくは次号にてご案内致します。

●世話人 湯浅芳郎
電話 0742-48-3389
携帯 090-6987-5847